

プロローグ——ソレルスの過去・現在・未来そして「中国」

現代の文学状況において、フィリップ・ソレルスはその受容に関して日本とフランスで大きな温度差のある作家と言えるのではないだろうか。前世紀の六〇〜七〇年代、先鋭なアヴァンギャルドとしてフランス文学界を牽引していたソレルスは、当時わが国においてもその著作が次々と翻訳され、刺激的なエクリチュール論が文学者の間に活発な議論を巻き起こしていた。今日、本国では相変わらず話題に事欠かない存在感あふれる作家であり続けるソレルスであるが、現代日本の文学地図においては果たしてどのような位置を占めるだろうか。

処女作『挑戦』⁽¹⁾でデビューした一九五八年には、当時一世を風靡していたフランソワーズ・サガンと並び称せられただけでなく、カトリック作家フランソワ・モーリヤックと共産党幹部であったシユルレアリスト、ルイ・アラゴンの二人から絶讃を浴びたことから、バチカンとクレムリンの

両方からお墨付きを貰ったと言われもしたソレルスは、その後まもなく作風を一変させ、『ル・モンド』紙の書評記者をして「この怪物を前にしては口をつぐむしかない」とまで言わせた実験小説『ドラマ』⁽²⁾を発表した。「変節漢ソレルス」による最初の変節である。「変節漢」の呼称は以後、ソレルスの作家としての生涯を通じてついて回ることになる。エクリチュールの実験へと大きく創作活動の舵を切ったソレルスは、以後「読めない」作品を次々と生み出す一方で、一九六〇年に進歩的カトリック系出版社スイユから季刊文芸誌『テル・ケル』⁽³⁾を刊行し、当時圧倒的に文学界を支配していたサルトルのアンガージュマン論へのアンチテーゼを掲げて他に類を見ない文芸活動をスタートさせている。『テル・ケル』は実験的作品の掲載だけでなく、ミシエル・フーコーとともにヌーヴォー・ロマンを巡る討論会を開催したり、ジャック・デリダと誌上でテクスト理論に関する対話を行うなど多彩な活動を展開している。当時まだ評価の定まっていなかったアントナン・アルトールやジョルジュ・バタイユを積極的に紹介するなど、独自の視点から多くの貴重な記事の掲載を試みており、その中には当時政治的に逆風にあつたハイデガー、エズラ・パウンド、セリーヌなどの作品も含まれていた。

*

六八年五月の事件が不完全燃焼に終わった後、閉塞感に悩むフランス知識人を熱狂させたのが中国から届いた文化大革命のニュースだった。文化大革命は、政治と文化の同時革命という西欧知識

人の見果てぬ夢の実現の可能性を垣間見させたのである。『テル・ケル』はこうした状況にいち早く反応し、当時共同歩調をとっていたフランス共産党との決別を宣言して毛沢東主義を鮮明に打ち出し、文化大革命を支持する活動を活発に展開していった。⁽⁷⁾だがやがてかの地の「革命」の実態が明らかになるにつれてさしもの熱狂も終熄に向かい、一九七六年の毛沢東の死を区切りとして収まっていった。『テル・ケル』の方向転換は素速く、それはソレルスの新たな変節伝説を生む要因となっている。

『テル・ケル』誌は一九八二年に廃刊し、翌年、後継誌『ランフィニ』⁽⁸⁾へと引き継がれた。時を同じくしてソレルスの『女たち』⁽⁹⁾が、『ランフィニ』誌の出版元となったガリマール社から刊行されたが、このベストセラー小説はまたしてもソレルスの変貌を読者に印象づけるものとなった。『女たち』は、それまでのソレルス作品を特徴づけていた難解さや斬新な文体から一変した「セリーヌばりの」スピード感溢れる平易な文章で書かれており、その諧謔に充ちたセンセーショナルな内容は大きな話題となった。日本でも翻訳されるや新しいソレルスの誕生が告げられ、その後八〇、九〇年代を通じて相次いで出版された著作も、かつてのアヴァンギャルド時代とは異なる新しい読者を獲得している。⁽¹⁰⁾

ソレルスは今現在も毎年ほぼ一冊のペースで新作を出版しているほか、季刊文芸誌『ランフィニ』の編集出版、「テル・ケル叢書」の後継「ランフィニ叢書」の刊行に携わるかたわらガリマール社の顧問を務めており、また折に触れて現代社会に向けて鋭い警告を発し続ける論客としても貴

重なる存在となっている。メディアへの登場も頻繁であり、過去の発言がフランス文化放送などで度々引用されるだけでなく、新作の発表や重大な発言がある毎にラジオ・テレビでインタビュ番組が組まれるなどしているほか、オフィシャルサイトや紹介サイト(1)の充実振りも目覚ましい。こうしたソレルスの手になる近年の作品は、ソレルス自身の表現によると「バルザック並に現代史の裏面を描いた」(2)もので、古今東西にわたる浩瀚な知識がちりばめられた内容は周到な調査に基づく批判精神に貫かれている。このようなソレルス作品は果たして、将来に向けてどのような射程をもちうるだろうか。その点について考えてみた場合、糸口の一つとして挙げられるのが「中国」である。

*

ソレルスは、日本だけでなく諸外国でも最もフランス的な作家の一人と考えられているようであるが、本当にそうだろうか。確かにソレルスの近年のいわゆる小説(3)には、一八世紀リユミエール時代をはじめとするフランスの作家・思想家が数多く登場する。だが夥しい数の著作を読んでいくのは、そのどこかで必ず中国に出会うことである。実は中国は、ソレルスが作家としての活動を開始した当初からきわめて重要な存在だったのであり、これまで作中で中国に言及しなかったことはほとんどないと言ってもよいほどである。「ソレルスの中国」はソレルスのエクリチュールにとって不可欠であり、「作家ソレルス」(4)の活動を支える地下水脈になっているのであるが、この事実はこれまであまり顕在化されてこなかったように思う。過去に作品中の中国について優れた分

析がなされたことはあるがソレルスにおける中国のあり方そのものについて問うことはなされてこなかったのではないだろうか。「ソレルスの中国」は、言うなればポーの『盗まれた手紙⁽¹⁵⁾』である。これ以上ないほど開かれてありながら人目を逃れ、見過ごされたままになってきたもの、だがしかし限りなく重要な意味を担っているものなのだ。

「ソレルスの中国」の核は道教である。ソレルス作品を注意深く読んでいくと、そこには道教がソレルスの終生のテーマとして通奏低音のように響いているのが分かる。道教はわれわれ日本人にとって古くからごく親しいものであり、井筒俊彦によるものなど学問研究の成果も豊富である。「ソレルスの中国」は、道教を出発点として古代中国の詩・絵画・書・エロティシズムと様々なジャンルにわたっており、それらが西欧文化と並置されることによって幅広い可能性が生まれるのではないだろうか。たとえば、老子・荘子について語りながらハイデガー・ヘラクレイトスに思いをいたすことで、硬直化した西欧文化の乗り越えに示唆を与えることが期待され、あるいはますます遠い国になりつつあるかに見える現在の中国を見つめ直すための新たな視点を探るヒントを求めることが考えられるのではないだろうか。中国は今もなお、道教の国であると言われもする⁽¹⁷⁾。その道教の国に古代から滔々と流れ続けているはずの道教の水脈を探り当てるために、「ソレルスの中国」は何らかの手がかりを与えてくれはしないだろうか。ソレルスの著作が数多く中国語に翻訳されていることは、こうした側面に明るい光を当ててくれるように思われる。「ソレルスの中国」には、当初から「東西の架け橋」の役割が託されているとも言える。

「ソレルスの中国」はオリエンタリズムではない。というのも「ソレルスの中国」は、オリエンタリストたちが狙いとした西による東の征服という究極の枠組みを根底において欠いているからである。ソレルスが常にとる並置のかたち、東／西、男／女……は、個を重視し、特異性に価値を見出す方法である。それを対位法的と呼びたいと思う。対位法においては、一つ一つの音が過去と未来を持っていると言われる。そこは「個が歴史を作る」(ヴィーゴ)⁽¹⁸⁾ 世界であって、オリエンタリズムの対極に位置するものであろう。

「ソレルスの中国」は「内なる中国」である。幼少期からソレルスの内奥に大切に温められてきた中国への憧憬の念は、文化大革命の狂乱の時期をくぐり抜け、ソレルス作品の織り糸として外在化されてきた。中国にあっては「内」は「外」である。ソレルスは自らの創作活動を通してそれを実現してきたと言える。「ソレルスの中国」は、誰にでも読まれるべく目の前にある「盗まれた手紙」ではないだろうか。